隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書

東船遺跡 Ⅱ

平成14年3月

島根県隠岐支庁空港建設局
隠岐島後教育委員会

隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書

東船遺跡 Ⅱ

船親王の墓（調査前）

第31調査区より今津港を見る

平成１４年３月

島根県隠岐支庁空港建設局
隠岐島後教育委員会

例　言

1．本書は、隠岐島後教育委員会が島根県隠岐支庁空港建設局の委託を受けて、平成13年度に実施した隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

調査の対象の東船遺跡は、平成10～12年度に島根県教育委員会がその大半の調査を行い、平成13年度はその残存部分について隠岐島後教育委員会が発掘調査を実施したもので、報告書もそれぞれに作成しました。

2．調査組織

調査主体	木瀬一郎	隠岐島後教育委員会教育長
事務局	斉藤弘徳	隠岐島後教育委員会社会教育課長
	藤原時造	隠岐島後教育委員会社会教育課主任
調査指導	島根県教育庁文化財課及び島根県埋蔵文化財調査センター	
調査員	横田　登	隠岐島後教育委員会社会教育課文化振興係長
	野津研吾	隠岐島後教育委員会社会教育課臨時職員
調査補助員	田中芳文	隠岐島後教育委員会社会教育課臨時職員（平成13年９月まで）
	西尾泰広	隠岐島後教育委員会社会教育課臨時職員（平成13年10月から）

3．現場における発掘作業及び遺物整理作業に参加、その他調査の実施に御協力頂いた下記の方々の名を記し、感謝の意を表します。

（敬称略）

門脇武雄	岩田良夫	滝下好一	松本由和	田中美穂子	古山長太郎	根本八重子
日野喜勝	新見淑子	井川京子	高平鈴江	池田長之進	藤野喜多子	佐々木安江
古林和子	金岡道子	清水和雄	藤野庄一	高梨美穂子	佐々木菊雄	佐々木貞子
荒木忠義	村上広美	但馬　保	服部　勤	斉藤正敏	野津哲志	野津美幸

4．本書の編集、執筆は、調査指導の先生方の指導、助言を得ながら、横田、野津、西尾が行いました。

5．本書で使用した遺構記号は次のとおりです。

ＳＩ＝竪穴住居跡　ＳＡ＝柵列　ＳＢ＝掘立柱建物跡　ＳＰ＝ピット　ＳＤ＝溝、溝状遺構　ＳＫ＝土壙

6．挿図中の矢印は真北を指します。なお、西郷における磁気偏角度は、Ｎ－7゜00－Ｅです。

7．本書中の高さはすべて海抜高で表示してあります。

目　　次

1　調査の経過　…… 1

2　位置と環境　…… 2

3　調査の概要　…… 4

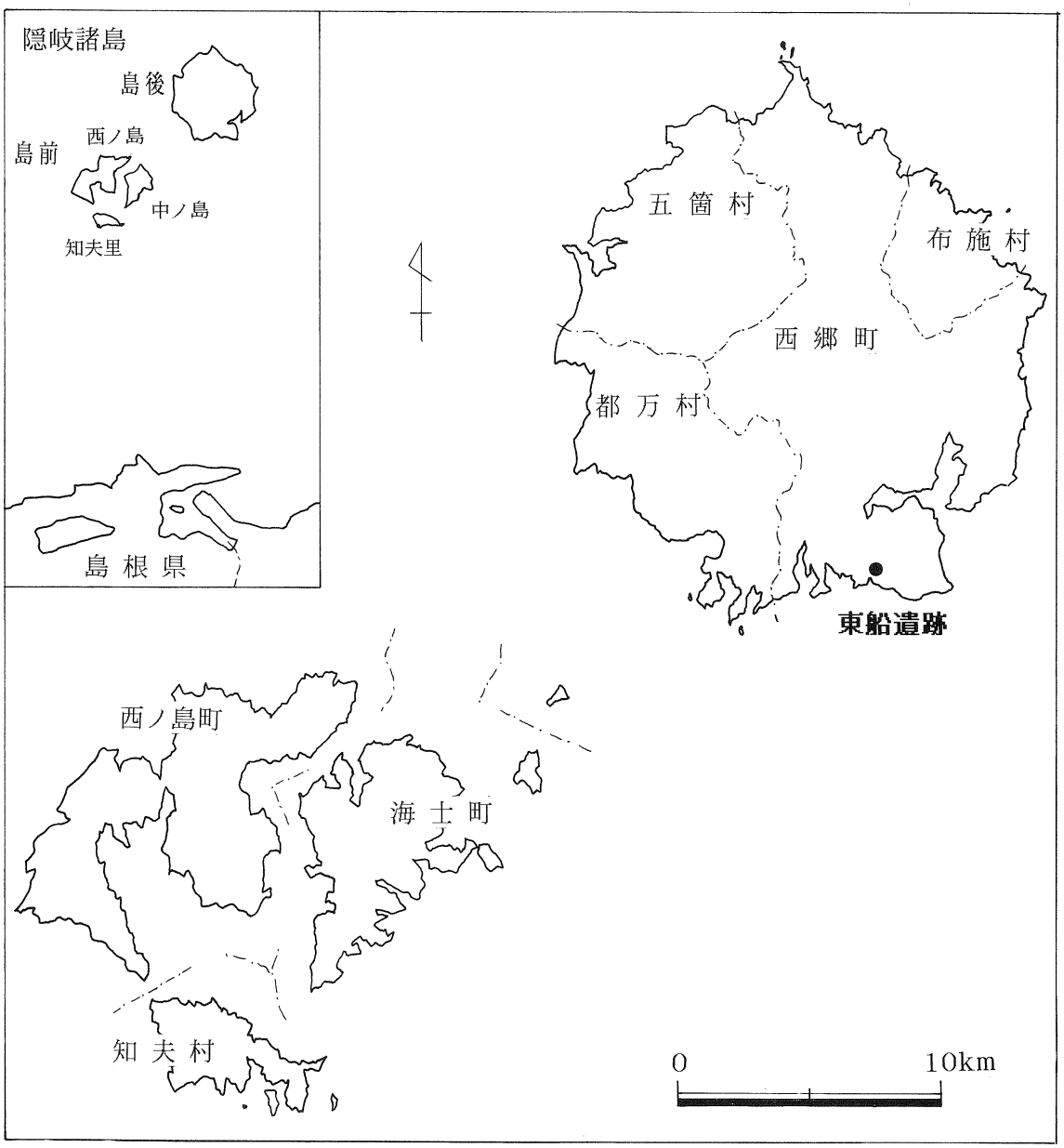
4　遺構と遺物　…… 5

5　おわりに　…… 14

1　調査の経過

隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財の調査については、平成７・８年度に島根県教育委員会、隠岐島後教育委員会により、周辺事業地を含め分布調査を実施しました。空港整備は、就航飛行機のジェット化を図るもので、滑走路の移転延長を主要な事業とするものです。家屋の移転等も多くあり、周辺事業地も含めると調査の対象地は膨大な面積でした。

分布調査の結果、かなりの範囲で土器片・黒曜石片の散布を見ることができ、８年度引続いて試掘調査を実施しました。これらの調査結果を基に、周辺事業地に所在する遺跡については地元の隠岐島後教育委員会が、空港整備（滑走路等空港本体部分及び客土採取予定地）に所在する遺跡については島根県教育委員会が実施することになりました。当東船遺跡は、島根県教育委員会が担当することとし、基本的に平成10～12年度の３ケ年での完了を目指してスタートしました。平成12年度の現地調査が終えた時点で、一部残ることになり平成13年度は隠岐島後教育委員会が、調査体制の規模をやや縮小して発掘調査を実施しました。



第１図　東船遺跡位置図

2　位置と環境

東船遺跡は、隠岐諸島の中の島後と呼ばれる島にあり、島根県隠岐郡西郷町大字今津に所在します。

隠岐諸島は、島根半島の北方沖合50～80㎞に散在する４つの住民島と、大小 180余の無人島からなっています。４つの住民島は大別して島前、島後と呼ばれ、南西部に位置する島前は西ノ島、知夫里島、中ノ島の３島の総称です。島後というのは島後一島の呼称で西郷町、布施村、五箇村、都万村の１町３村で構成されています。島後は、群島中最大の面積(243㎢) をもち、ほぼ円形に近い形をしていますが、島の南東部、北西部にそれぞれ西郷湾、重栖湾が切り込みをつくっており、天然の良港となっています。

島の地勢をみると、最高峰大満寺山(608m) を中心とする山地は起伏がはげしく、それらが海岸まで続き断崖絶壁の海岸線を作っています。その中で、北西部の五箇村、北部の西郷町中村、南部の西郷町平、南西部の都万村にはまとまった平地があります。中でも西郷湾に流れ込む隠岐最長の八尾川の形成した八尾平野（西郷町平）は、隠岐最大の穀倉地帯といえます。島後の遺跡はこれら平野を取り巻くように集中しており中でも、西郷湾周辺は密集地といえます。

東船遺跡の所在する今津地区は、この西郷湾の南側の谷筋を通ったところに位置し、外海に面しています。東船遺跡は、海岸すぐ近くの標高約10～30mの緩やかな斜面上に広がっています。この東船遺跡は、島後では唯一の旧石器時代の遺物（黒曜石の細石刃核）が出土している遺跡で、さらに縄文時代の土器も見つかっています。

周辺の遺跡についてみると、縄文時代の遺跡は、ほとんどが西郷湾内沿岸部に所在しています。波の穏やかな内海での生活を基盤としていたものと思われます。前期を中心とする遺跡として宮尾遺跡（西郷町東郷）が、西郷湾の東湾ともいうべき奥の小半島部に位置しています。時代が下るにつれて西方への移動が見られ、前期末から後期にかけての下西海岸遺跡（西郷町下西）、後期を中心とするくだりま遺跡（西郷町下西）などがあります。宮尾遺跡では条痕文土器や爪形文土器が見つかっていますが、この条痕文土器は本土山陰側の佐太講武式に比定されるように、他の遺跡の縄文土器も、器形・文様等本土側と良く似た歩みが見られます。

弥生時代の遺跡としては、前期～中期の土器が月無遺跡（西郷町八田）で八尾川改修工事中に見つかっています。そこから下流の小高い丘陵上の大城遺跡では、後期の四隅突出型墳丘墓が築かれています。

古墳時代に入ると、前期の古墳はまだ見つかっていませんが、中期から後期にかけての古墳が八尾平野の西側と南側の丘陵地帯に集中しています。早い時期の古墳としては斉京谷古墳群（西郷町下西）があります。５世紀代の円墳で径約25m、鉄直刀・鉄鏃等が出土しています。６世紀に入ると、小円墳が多数築かれるようになり、また前方後円墳も造られるようになってきます。島後最大の前方後円墳としては、八尾平野の西側に平神社古墳（西郷町平）があります。全長47m、後円部径約28m、高さ５mの墳丘をもち、くびれ部には横穴式石室が開口しています。７世紀代には横穴式古墳も多数造られるようになります。

奈良朝以降についても、八尾平野に条里制も確認されており、八尾平野の北側丘陵には国分寺・国分尼寺跡、南側の台地には国府が所在し政治の中心地といえます。中近世については、あまり研究が進んでおらず、今後の課題といえます。

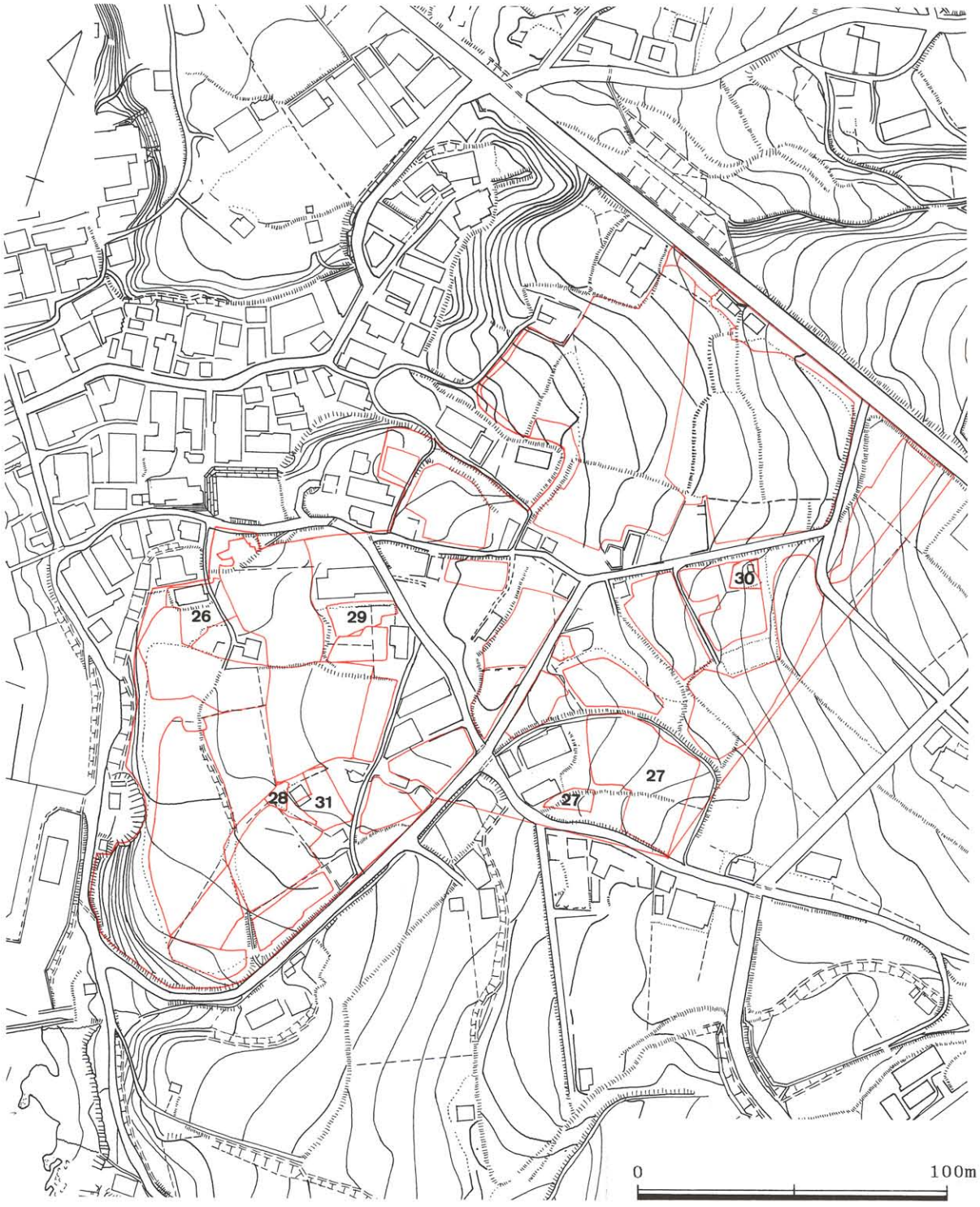
第２図　東船遺跡周辺の遺跡分布図

１.船ケ谷古墳　２.向田古墳群　３.隠岐国分寺　４.野中西遺跡　５.隠岐国分尼寺跡　６.野中東遺跡　７.尼寺原遺跡　８.大光寺跡
９.宮田城跡　10.水産高校西側横穴　11.小田古墳　12.飯田小学校裏古墳　13.本先古墳　14.平神社古墳　15.平西古墳　16.平東古墳群
17.子安神社古墳　18.中山古墳群　19.中山遺跡　20.八尾川流域条里制遺跡　21.月無遺跡　22.名田古墳群　23.神米古墳群
24.小田西光寺古墳　25.神米遺跡　26.宮尾遺跡　27.宮尾古墳群　28.津井古墳群　29.津井海岸遺跡　30.ヒノメサン古墳群
31.下西御崎神社古墳群　32.椿古墳　33.権得寺跡　34. 玉若酢命神社古墳群　35.神殿古墳群　36.玉若酢命神社境内古墳群
37.億岐氏宅裏山古墳　38.宮ノ前古墳　39.ハサコ古墳群　40.斉京谷南古墳群　41.斉京谷古墳群　42.田井古墳　43.能木原古墳群
44.能木原遺跡　45.甲ノ原遺跡　46.大将軍遺跡　47.甲ノ原古墳群　48.白髪古墳群　49.下西海岸遺跡　50.国府尾城跡　51.要木遺跡
52.西郷小学校古墳群　53.大川神社古墳　54.登具トンネル遺跡　55.ヘギ古墳　56.ヘギ遺跡　57.清久寺裏遺跡　58.半崎横穴
59.西郷公園古墳　60.磯中学校脇古墳　61.大座古墳群　62.くだりま遺跡　63.高井古墳　64.飯の山横穴群　65.奥田遺跡　66.森遺跡
67.国司塚古墳　68.御崎谷Ⅰ遺跡　69.大床遺跡　70.御崎谷Ⅱ遺跡　71.大城遺跡

3　調査の概要

前年までの島根県教育委員会の調査を引き継ぐかたちとなり、調査区の呼称についてもこれに倣ったものです。飛び地状態の調査箇所を、空港整備関連事業の緊急度、立ち入りの可能等を考慮しながら、順次発掘調査を実施しました。

※赤枠は全体の調査区、数字は本年度実施の調査区No、数字のない区は調査済み



第３図　調査区配置図

4　遺構と遺物

Ⅰ　遺　構

〔第26調査区〕

12年度の第18調査区に隣接した調査区です。18区では、中世の堀立柱建物跡と、数多くのピットが検出されていました。このピット群は、この調査区内に集中しており、本年度の調査においてはこの端の部分と思われるピットが僅かに検出されましたが、関連性は確認できませんでした。

これ以外には、土壙８、溝状遺構２が検出されました。

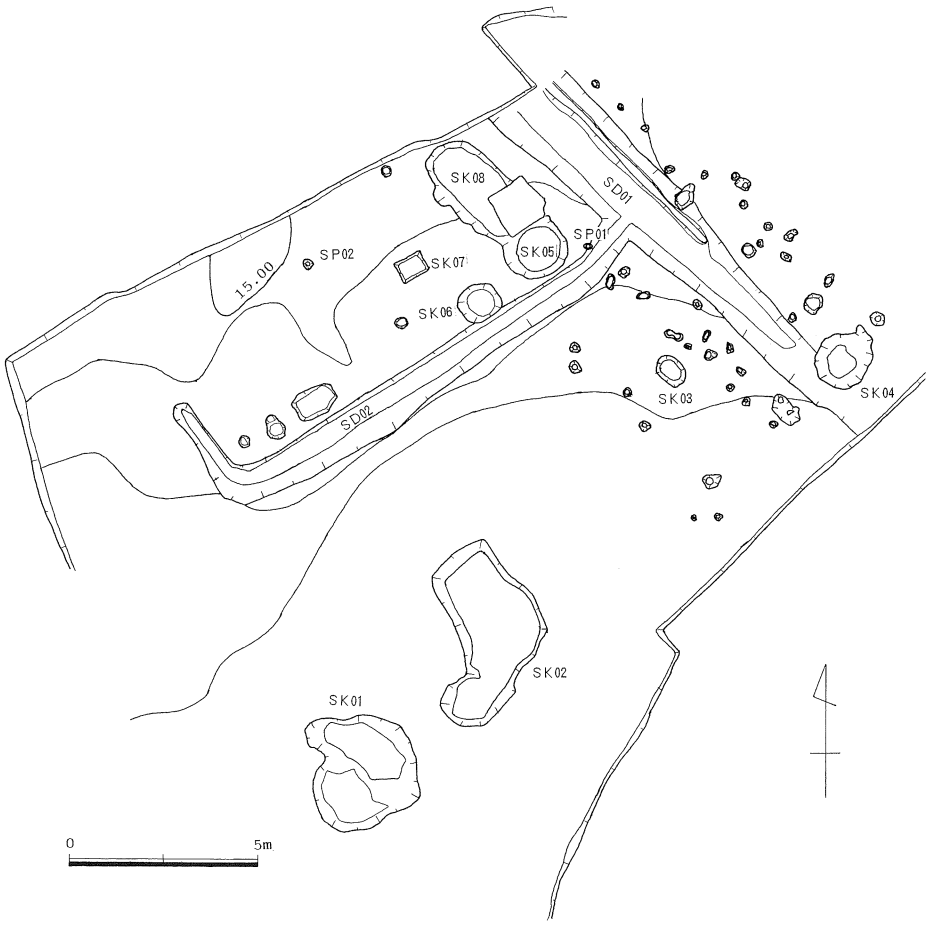
ＳＫ01・02・03・04・05・06・07・08

ＳＫ01・02は、かなり深い土壙ですが伴出遺物がなく、年代・性格共に不明です。木の根の攪乱とも思えますが、調査区東側に隣接して近代の土葬の墓がありますので、その関連性も考えられます。

ＳＫ03は、規模の小さい土壙で残存深さも浅く、数㎝で底部が検出されました。埋土は、粘性の強い灰褐色の土ですが、遺物はありませんでした。

ＳＫ04・05・06は、形態・規模が酷似しており、また伴出遺物も近世～近代の陶磁器ということで、ほぼ同時期に作られたものと思われますが、その性格については良く分かりません。

ＳＫ07・08については、この部分に民家が建てられていたとのことで、聞き取りの結果、ＳＫ07はコタツの跡、ＳＫ08は便所の跡ということが分かりました。



第４図　第26調査区実測図

ＳＰ01・02

どちらも平面径は小さいものですが、深さはかなりあり、底部に蓋付きの陶器が納められていました。丁寧に納められたらしく、完形で出土しました。

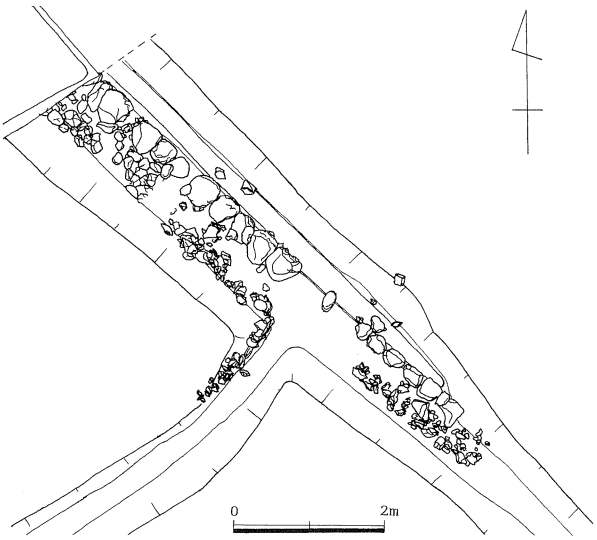
ここではピットとしましたが、出土状況を見ると地鎮等の意味を持つ埋納壙と見ることもできると思われます。

ＳＤ01

南東から北西の方向に向けて作られています。地形そのものも、北西方向に緩やかに傾斜しており、溝の深さも浅いところでは20㎝位ですが、北西に向かうほど深くなっています。

溝底部西寄りには、人頭大の石が敷き詰められており、東側にはかなりの大きな石が整然と並べられています。地元の方の話では、調査区の東側にある墓地に行くための小道として使われていたとのことで、そのための敷石、石組と思われます。

出土した遺物は近世～近代のものがほとんどで、この遺構は近世に作られ、使用されていたものと思われます。



第５図　ＳＤ01内の敷石、石組の状況

〔第27調査区〕

この部分については、10年度当初においては調査対象地に入っていなかった箇所です。前年までの調査で、直ぐ北側に隣接する箇所において遺構・遺物が検出されており、また、地形的にも東から西に流れる谷状になっており、遺物が流れ込んでいる可能性が高いと判断されました。このため、試掘調査を実施することにし、谷を横断するように幅５ｍのトレンチを３本設定し調査を実施しました。その結果、大量の土器の破片と黒曜石片が出土し、全面調査を実施することになりました。

遺構は、柵列と土壙のみでしたが、谷の部分からは、石鏃・石斧、土錘、土師器・須恵器・陶磁器片等が多く出土しました。

ＳＡ01

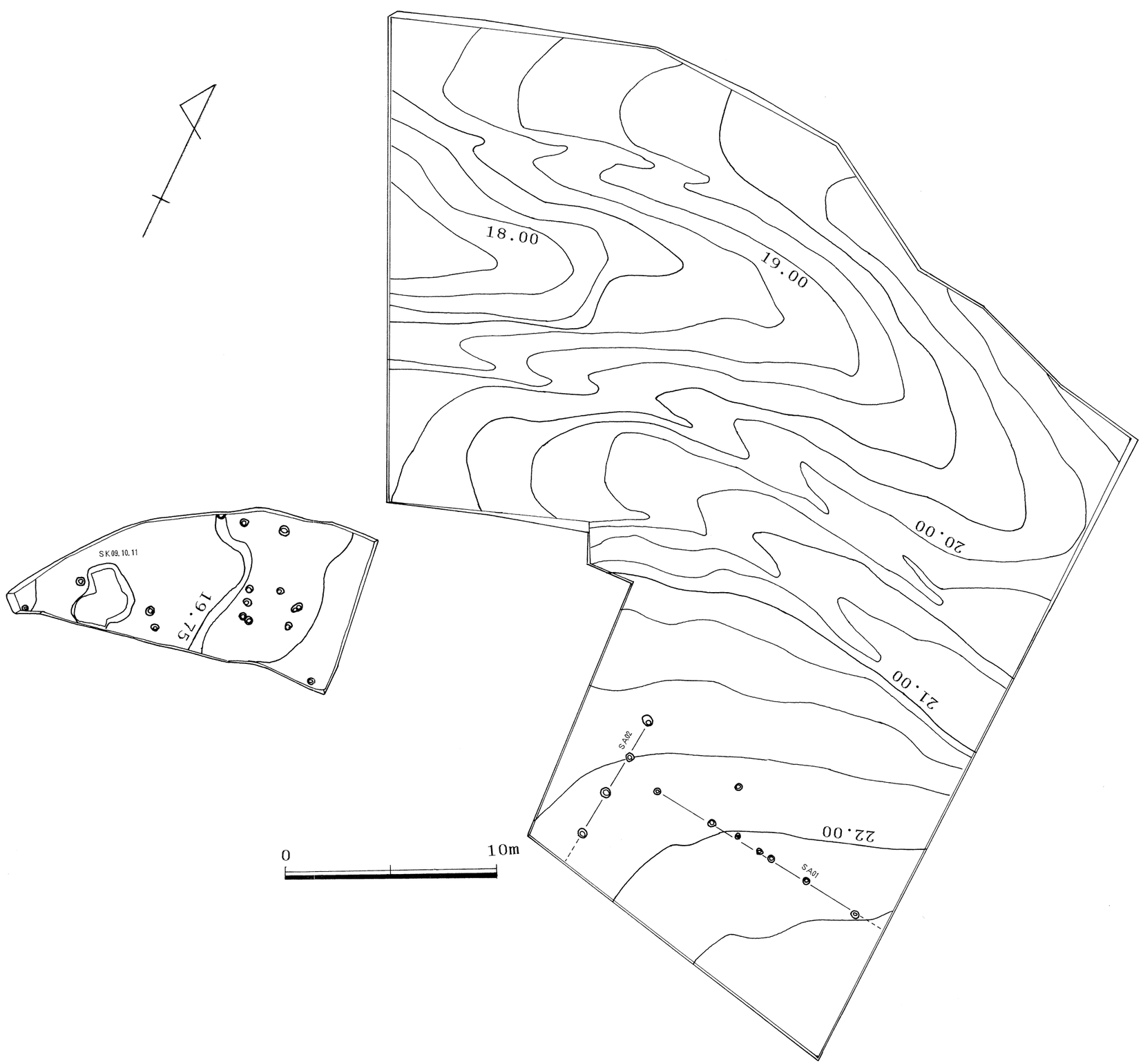
ほぼ東西方向で、４間分が検出されました。ピットの径は10～15㎝で残存深さも浅いものでした。埋土も軟質なもので近代のものとも思われますが、伴出遺物もなく不明です。

ＳＡ02

ＳＡ01に直交するように、南北方向で３間分検出されました。南側に延びる可能性もあります。ピットの残存状態は良くありませんが、間隔も揃っており、径もＳＡ01より大きく埋土もしまっており時代的に古いと思われますが、伴出遺物がなく年代・性格等は不明です。

ＳＫ09・10・11

３基の土壙が重なって検出されました。切り合いからみて、最初に北側の正方形の土壙、次に調査区壁際にあるもの、最後に東側の土壙という順序で作られたと判断できます。性格・年代等は不明ですが、最後に作られた土壙の形態・立地位置等を考慮すると、当地に類例の多い畑耕作のための肥溜めの可能性が高いと思われますが、確認はできませんでした。



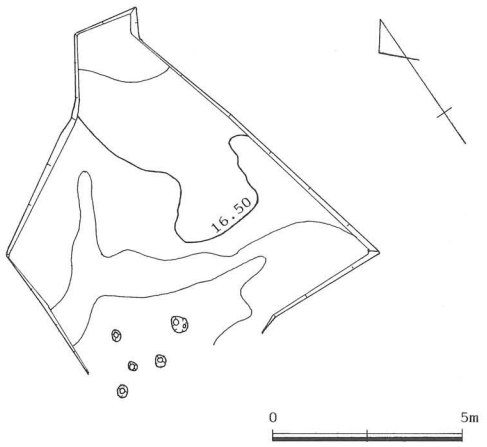
第６図　第27調査区実測図

〔第28調査区〕

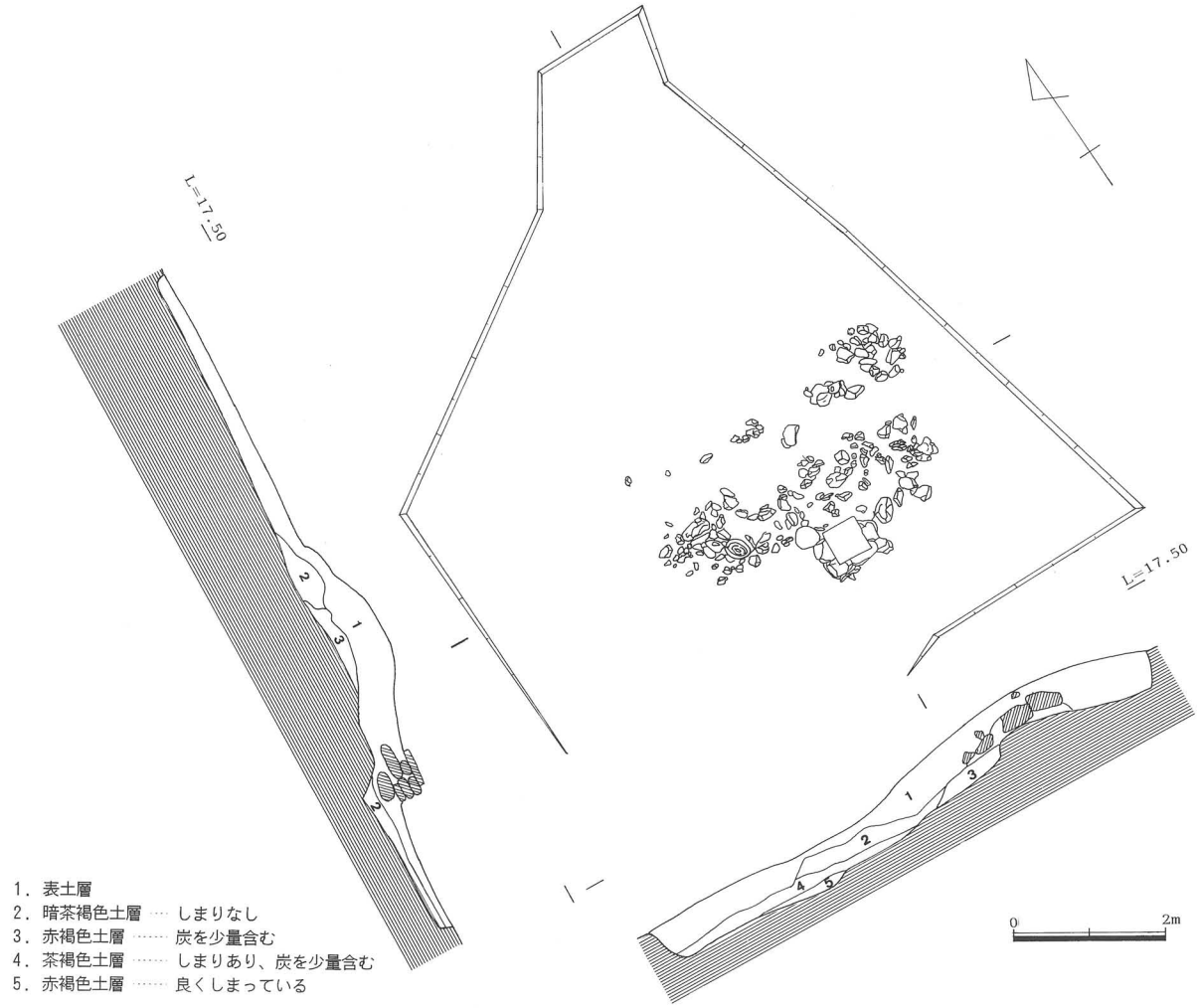
この調査区には、地元の人から「地主さん」と呼ばれ、代々祀られている小祠があります。小祠は、畑と畑の境の、少し段差のある場所に位置し土を盛り上げ、礫が集められており径約４ｍ、高さ約50㎝の円形をしています。

小円墳の可能性もあり、調査を実施しましたが円墳とは確認できませんでした。

一段下がった平坦面で数個のピットが検出されました。



第７図　第28調査区実測図



第８図　第28調査区石の散布状況

〔第29調査区〕

宅地の前庭として使われていた場所です。庭の西の端からは一段下がって畑になっているところです。

かなり削平を受けており、表土そのものは薄く、数cmで遺構面になります。

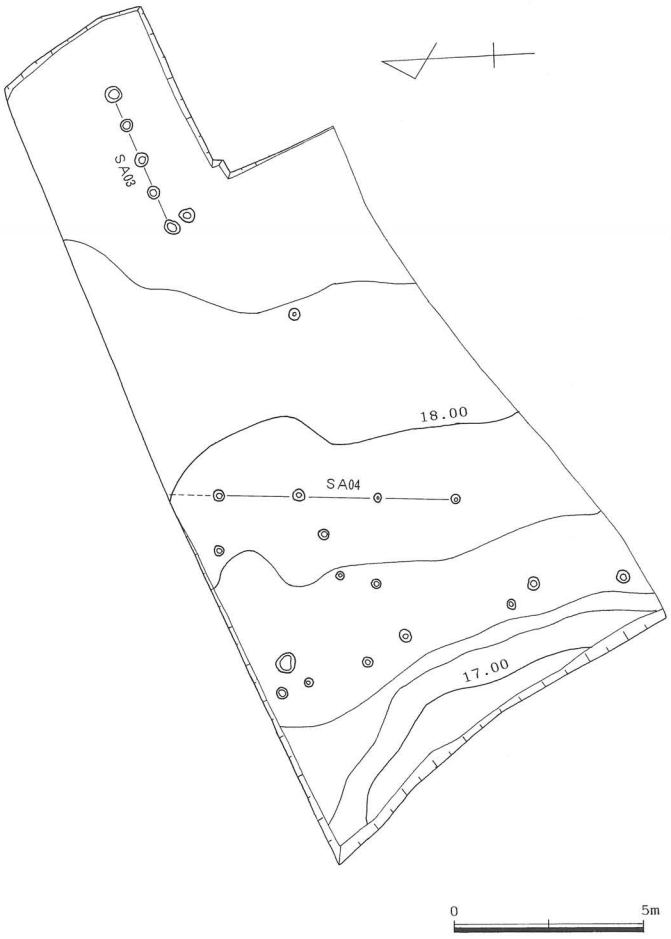
柵列が２つ検出されました。遺物はこの調査区の中央から南では土師器、土師質土器の小片が数点出土しました。

ＳＡ03

約１ｍの間隔で４間分検出されました。前述のように、かなり削平を受けており遺存状態は良くありませんでした。伴出遺物として、陶磁器片が出土しましたが、小片のため年代を特定するまでには至りませんでした。

ＳＡ04

調査区のほぼ中央で、南北方向に３間分検出されました。性格年代共に不明です。



第９図　第29調査区実測図

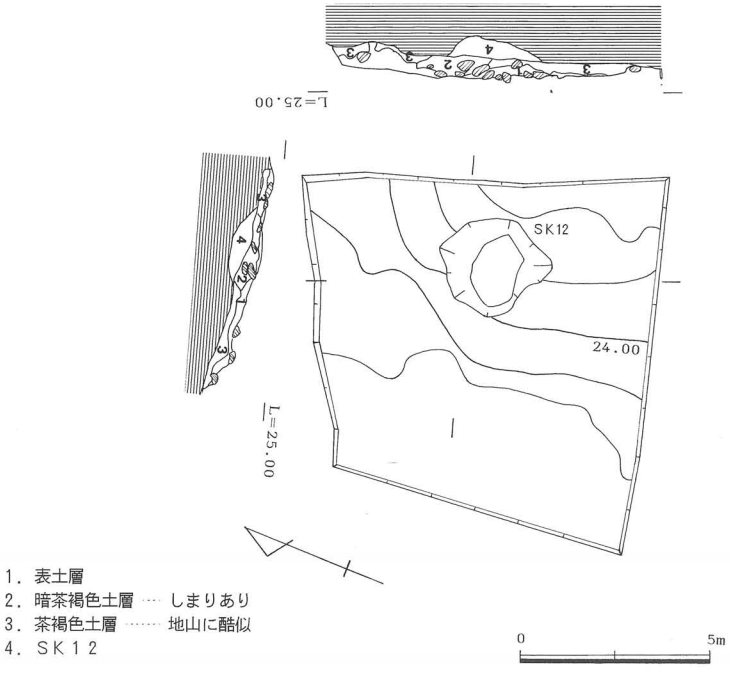
〔第30調査区〕

「親王塚」と呼ばれる墓がある場所です。この墓は、天平宝字８年の藤原仲麻呂の乱が原因で隠岐の島に流された船親王を祀ってあるといわれています。

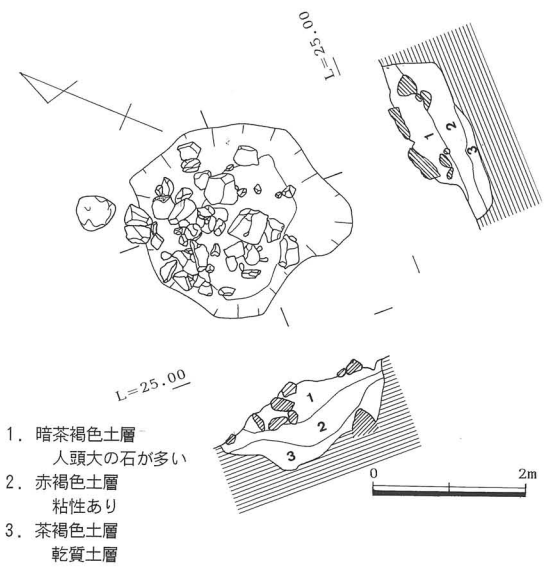
丘陵上に、自然地形を利用しながら人頭大より少し大きめの石を積み重ねて、長方形にの区域を作り、中央に小祠を置き、その後ろに五輪塔や宝篋印塔が、無秩序に積まれています。

調査はベルトを十字に残し、土層を確認しながら実施しました。

土壙が１基検出されました。



第10図　第30調査区実測図



第11図　ＳＫ12実測図

ＳＫ12

土壙は、様々な大きさの石で覆われた状態で検出されました。石は上場だけでなく、30～40㎝の深さまでは、疎らに入っていましたが、石質からみると、埋め込んだものでなく、重さで沈み込んだものと思われます。

土壙の大きさは、上場径約 2.5ｍ、深さ約１ｍで円形に掘り込まれています。遺物は出土されませんでした。

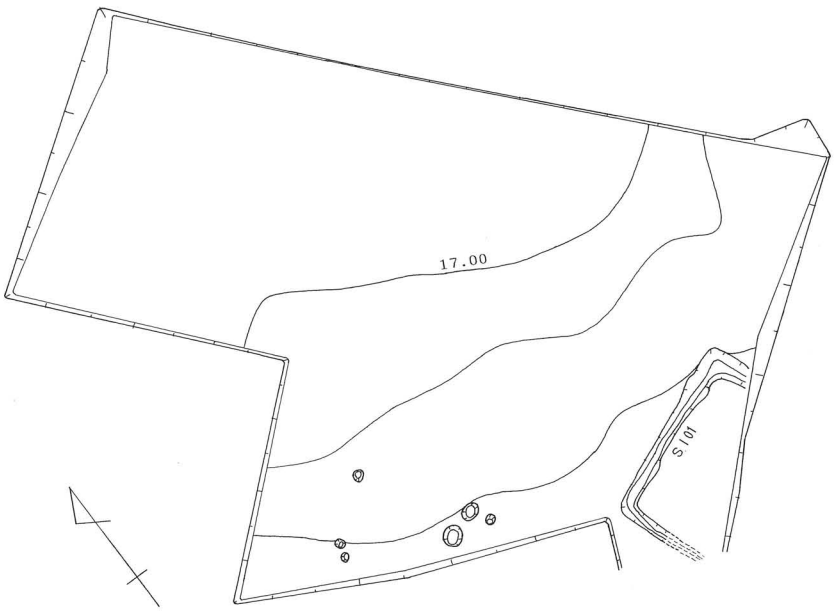
〔第31調査区〕

ＳＩ01

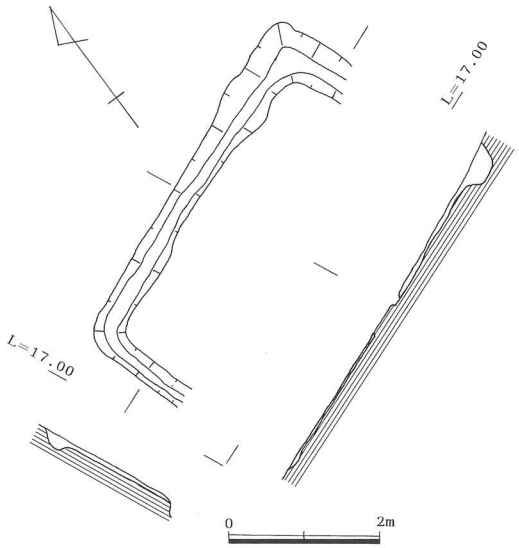
検出された竪穴住居址は、南東側半分以上が建造物のために削られ失われており壁が僅かに残る程度でした。溝の遺存状態は良く、幅約30㎝で壁際に掘られていました。

方形で、南北方向で約５ｍあります。ピットは検出されませんでした。

土師器の小片が出土しており、また、その形状から古墳時代のものと思われますが、それ以上の時代の特定はできませんでした。ただ、前年までの調査で、このＳＩ01の南方 100～ 120ｍの地点で、円形状の弥生時代の竪穴住居址が見つかっており、それより下る頃と見て良いと思われます。



第12図　第31調査区実測図



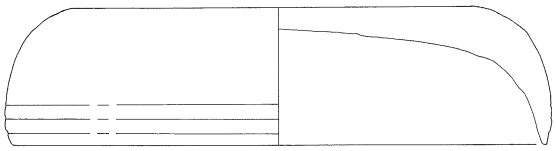
第13図　ＳＩ01実測図

Ⅰ　遺　物

東船遺跡では、縄文から近代にかけての長い時代範囲のなかで、様々な遺物が出土しました。中でも、黒曜石片は多量に出土しました。製品となるものは非常に少ないですが、石鏃等が見つかっています。土器類では土師器がほとんどですが、須恵器、陶磁器類、それに土錘も少しですが検出されています。土器類は小片が多く、器種・器型の分かるものは少ないのですが、土師器の中の形の分かるものは古墳時代後期が主流です。検出された遺構そのものが少ないこともありますが、遺構に伴う遺物の出土例が非常に少なく、どちらかといえば混濁状態の出土と言えます。

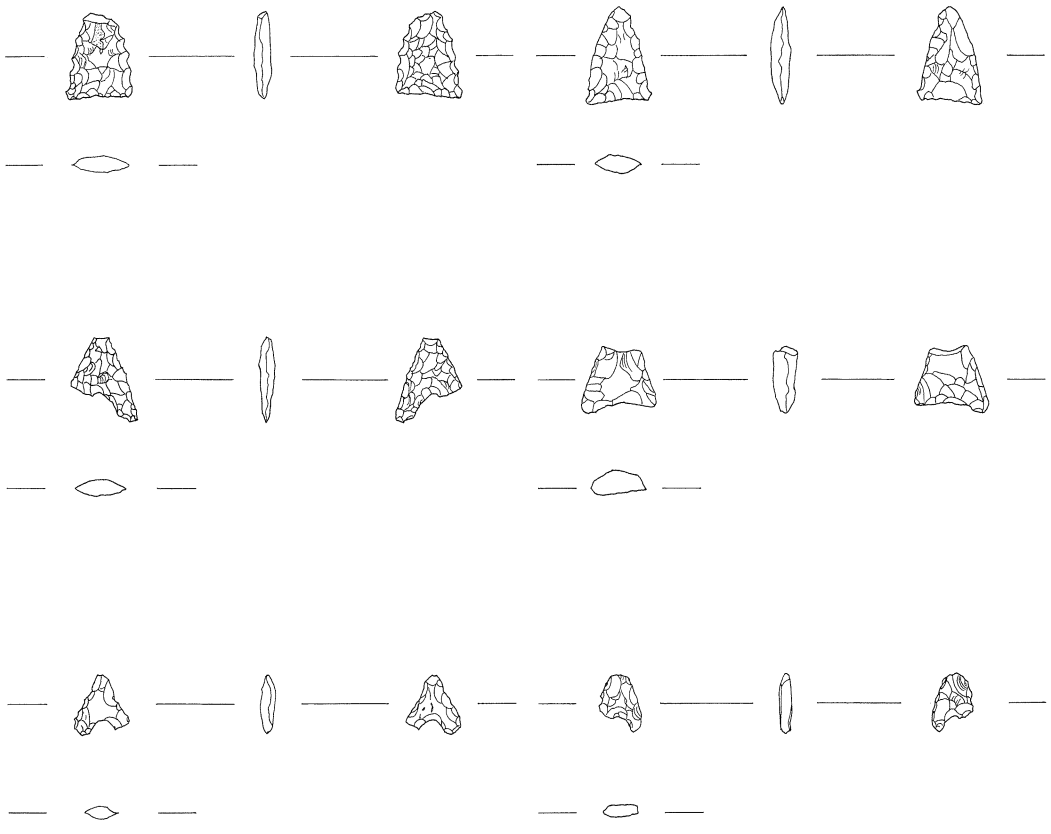
この項では、比較的形の分かる遺物の実測図を掲示し、報告とします。

【第26調査区出土】

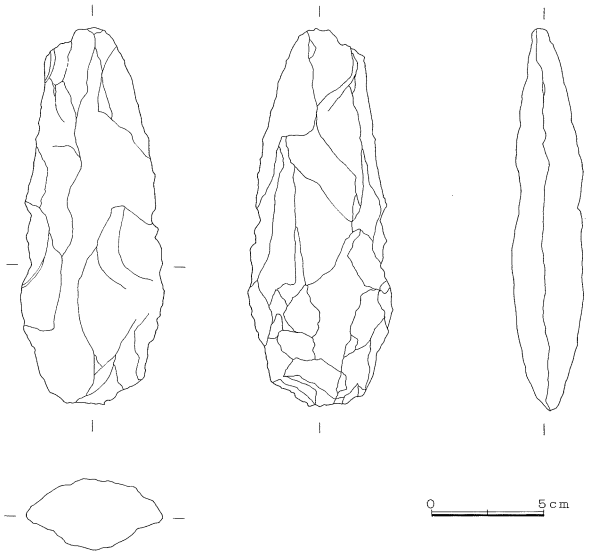


須恵器（S＝1／2）

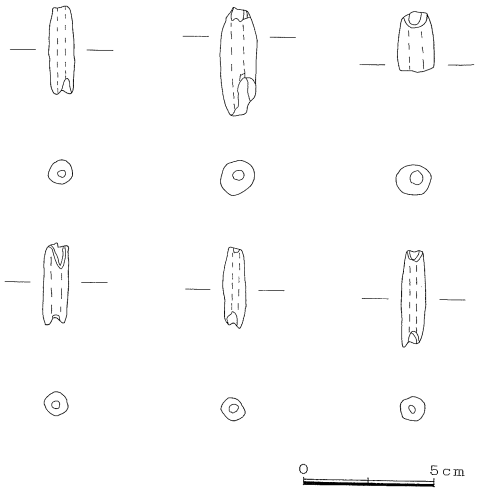
【第27調査区出土】



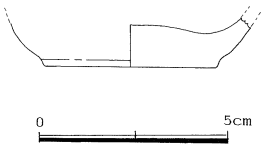
石鏃実測図（S＝1／2）



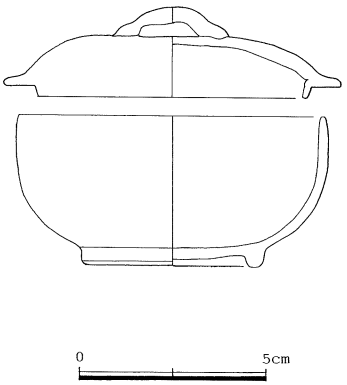
石斧実測図（S＝1／4）



土錘実測図（S＝1／3）

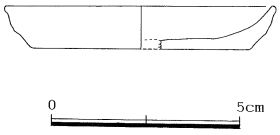


土師質土器実測図（S＝1／2）



陶器実測図（S＝1／2）

【第28調査区】



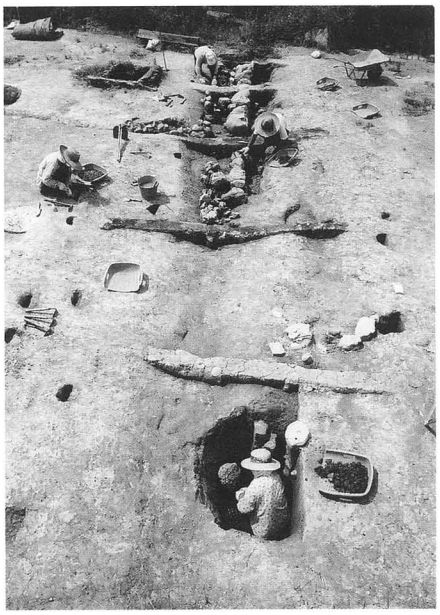
土師質土器実測図（S＝1／2）

5　おわりに

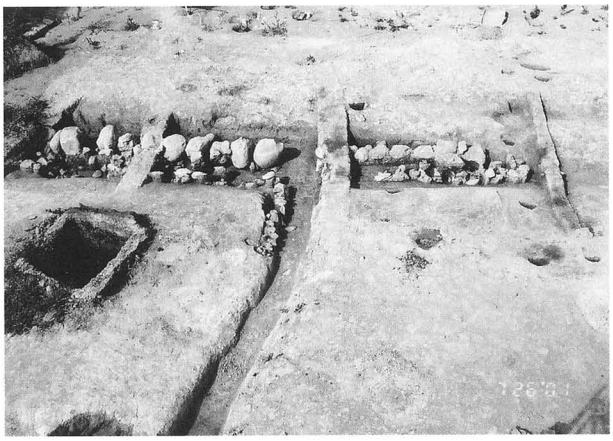
東船遺跡においては、旧石器時代から近世・近代にかけての幅広い年代での遺構・遺物が検出されています。本年度の調査においては、明確な遺構としての検出は、竪穴住居址（ＳＩ01）だけといえるかもしれませんが、遺物についてみるとかなりの量が出土しています。なかでも、製品、完形品は少ないものの、黒曜石、土師器の出土量は相当のものがあります。黒曜石についていえば、隠岐島は中国地方では唯一の産出地であり、驚くに足らないかもしれませんが、島内産地間の交流については、まだまだ研究の余地が残っており、貴重な資料と成りえます。調査を終えたばかりで、全ての出土品に対して詳細に検討を加えていない部分もあり、今後の課題といえます。

また、前三ケ年の島根県教育委員会の調査成果とつきあせて検討することにより、より貴重な資料が得られるものと思います。特に、中近世の陶磁器が多量に出土しており、建物跡についても弥生時代の竪穴住居から近世の掘立柱建物跡まで検出されており、これらを総合的に検討すれば今津地区の社会生活の歴史が明らかされるものと思います。このことは、隠岐の中近世の歴史のさらなる解明に役立つものであるといえます。

第26調査区



ＳＤ01調査風景

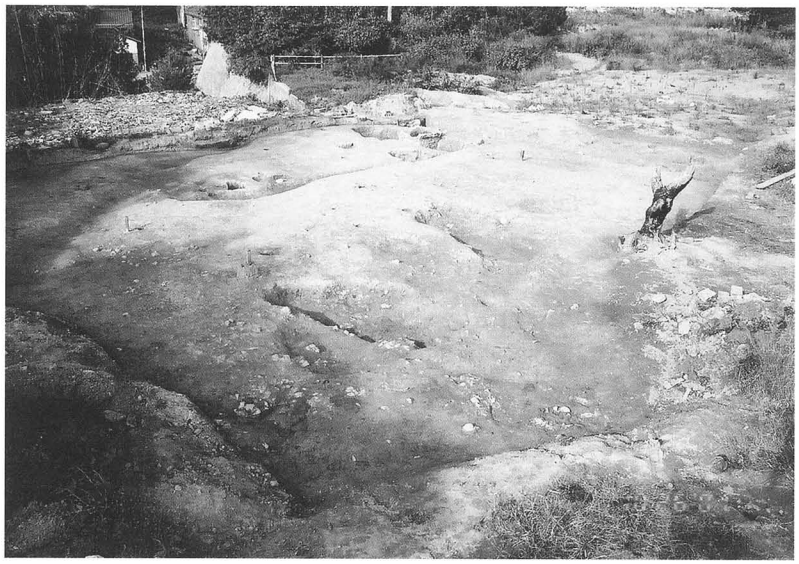


ＳＤ01石組の状況（南から）

ＳＤ01完掘後の状況（南東から）

第26調査区

完掘後の状況（北東から）



完掘後の状況（南から）

遺物出土状況 － ＳＰ01

遺物出土状況 － ＳＰ02

第27調査区

完掘後の状況（北から）

完掘後の状況（北東から）

ＳＫ09・10・11完掘後の状況

第28調査区

盛土断面の状況（西から）

盛土断面の状況（北から）

完掘後の状況（南から）

第29調査区

完掘後の状況（南西から）

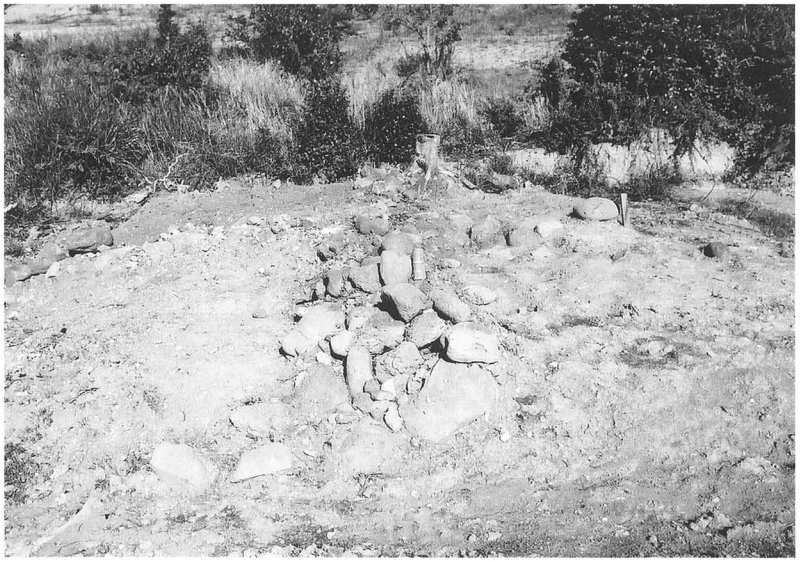
ピット群の検出状況（北西から）

ＳＡ03（北東から）

第30調査区

調査前の状況（西から）

調査前の状況（西から）



ベルトの設定（南から）

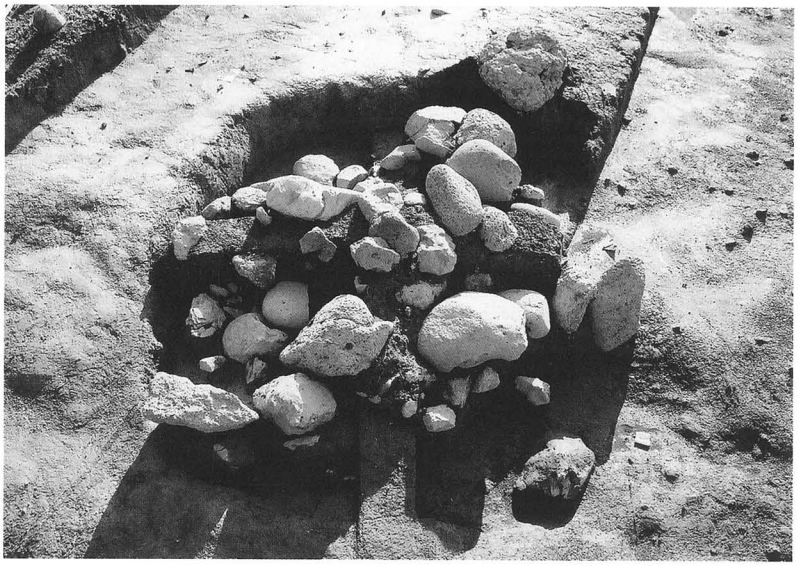
第30調査区

掘下げの状況（西から）

土層断面の状況（西から）

土層断面の状況（西から）

第30調査区



ＳＫ12（北から）

ＳＫ12完掘後の状況（北から）

完掘後の状況（南西から）

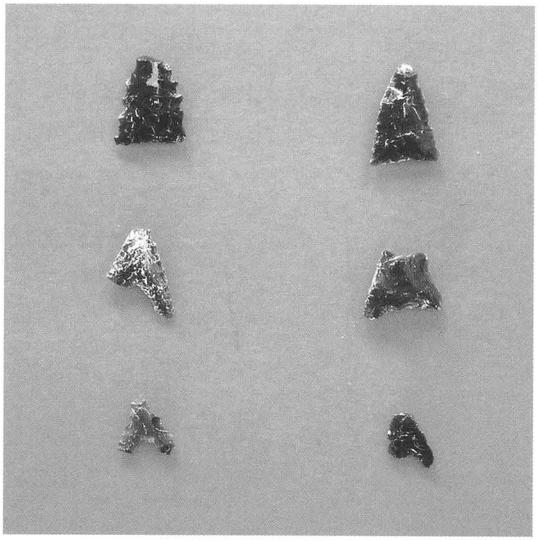
第31調査区

ＳＩ01（北から）

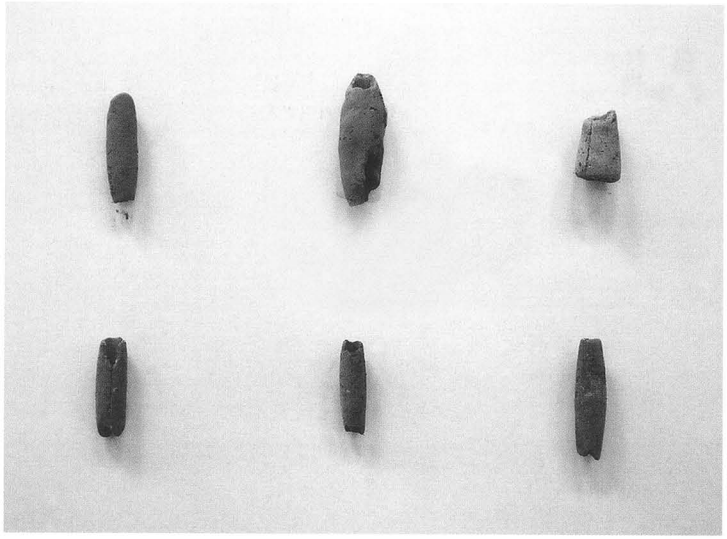
調査区から今津港を見る

遺　物

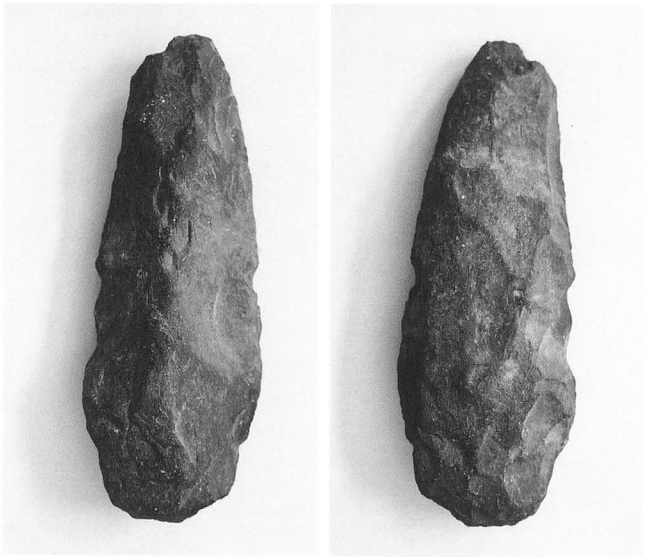
第26区出土　須恵器



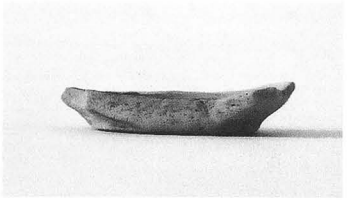
第27区出土　石鏃



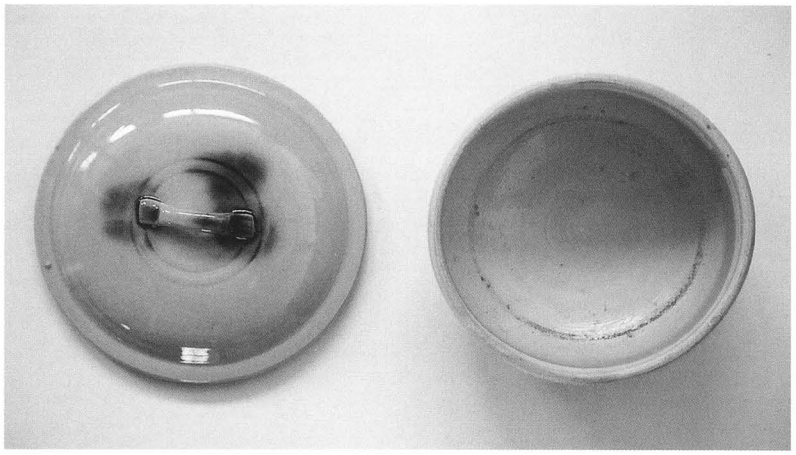
第27区出土　石錘



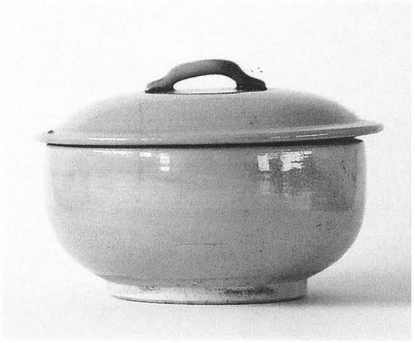
第27区出土　石斧

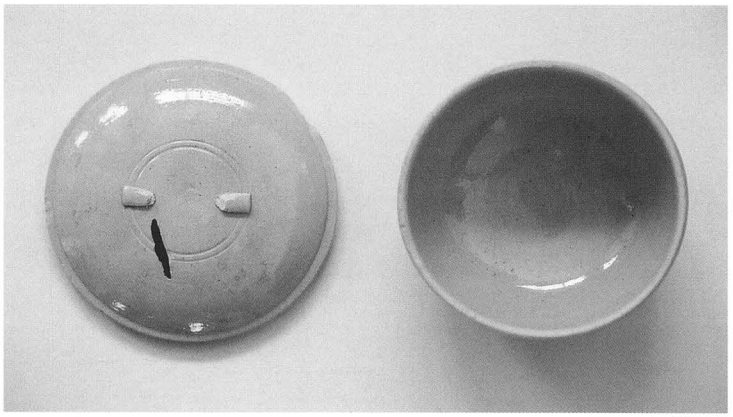


第27区出土　土師質土器

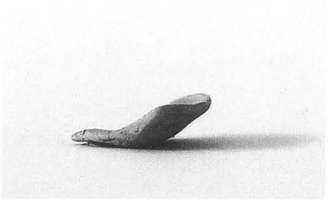


第27区出土　陶器（ＳＰ02）





第27区出土　陶器（ＳＰ01）



第28区出土　土師質土器

報告書 抄録

ふりがな	ひがしふねいせき
署名	東船遺跡Ⅱ
副署名	隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	横田登、野津研吾
編集機関	隠岐島後教育委員会
所在地	〒685-0014　島根県隠岐郡西郷町大字西町字八尾の一，58　　TEL 08512-2-2126
発行年月日	２００２年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひがしふねいせき 東船遺跡	しまねけんおきぐん 島根県隠岐郡 さいごうちょうおおあざ 西郷町大字 いまずあざひがしふね 今津字東船	32521		36度 10分 20秒	133度 18分 50秒	20010402 ⇩ 20020329	約 2,000	隠岐空港整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東船遺跡	集落跡	縄文 ～ 近代	竪穴住居址 船親王墓（伝）	土錘、石鏃、土師器 須恵器、陶磁器類	

隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書

東船遺跡　Ⅱ

編　集　　隠岐島後教育委員会
　　隠岐郡西郷町西町八尾の一，58
発　行　　平成１４年３月
印　刷　　渡部印刷株式会社
　　松江市中原町192